

切尔ノブイリ通信

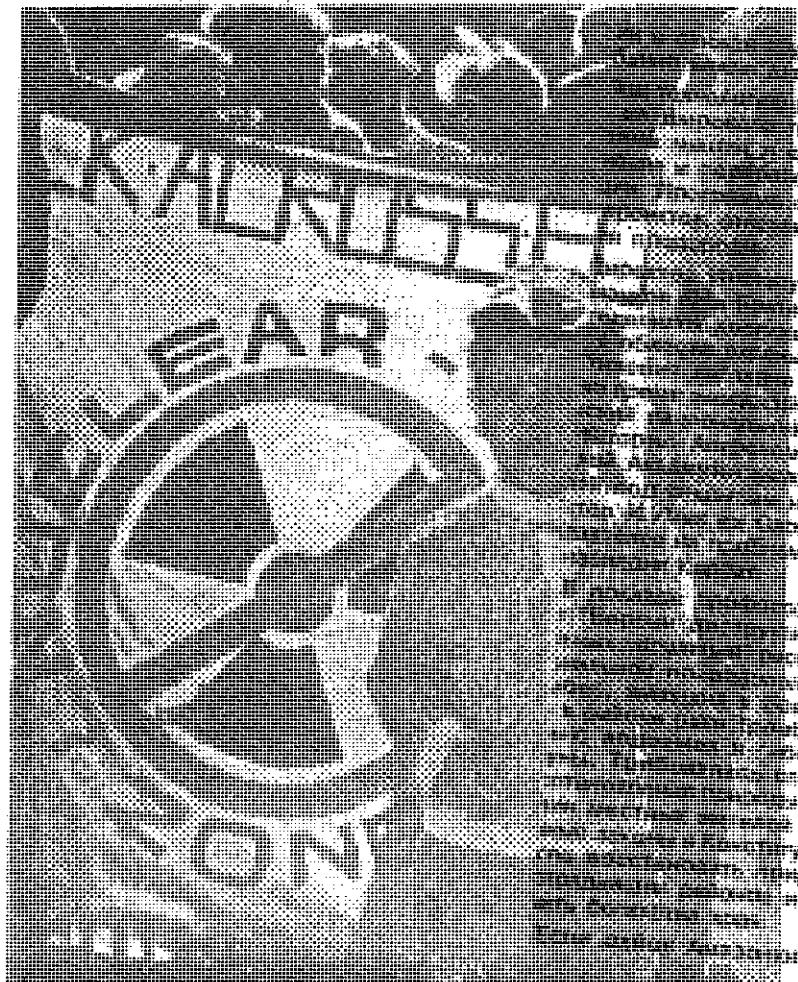
発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号
Tel·Fax 093(681)1780

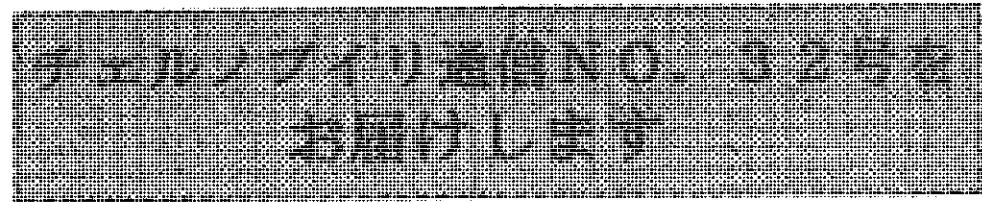
口座番号 01770-1-65328
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1996年1月27日

No.

32号





チエルノブイリ原発事故から
10年を迎えます。
皆さん、今年もよろしく
お願いします！

今年の4月26日に、チエルノブ
イリ原発事故から10年目を迎えます。
しかし、現地では放射能による病気が
ますます増え、まだ発病していない人
達も不安な日々を送っています。

昨年末から今年にかけては、高速増
殖炉「もんじゅ」の事故とその事故隠
し、ズサンな国の安全審査の実態など
改めて原発の危険性を教えてくれま
した。また、九州電力は、地元住民の合
意が得られないとして、宮崎県串間市
への原発の新規立地を「凍結する」と
発表。新潟県巻町での出直し町長選挙
では原発反対と住民投票の実施を主張
する町長が誕生し、この夏にも原発建
設の是非について住民が直接意志表示
する全国初の住民投票が実施されそう
です。今年は、原子力発電をめぐって
ドラスティックな変化がおきるかもし
れません。

私たちはチエルノブイリを繰り返さ
ないためにはどうしたらよいのかを一
緒に考え、行動していく一年としたい

ものです。

チエルノブイリ支援運動・九州スタ
ッフは、昨年「わたしたちの涙で雪だ
るまが溶けた」の出版という大きな仕
事をすることができました。今年はこれ
をきっかけに大きな展開が期待され
ます。昨年、新しいメンバーを迎えて
スタッフもすっかりリフレッシュでき
ました。新しい息吹を感じられる10
周年企画をお見逃しないよう、通信に
じっくり目を通してください。

【今回の内容】

- チエルノブイリ・スタディツアーオ
ークセラ
- 10代の若者たちによる「チエルノ
ブイリ・チャリティーコンサート」
のご案内
- 第6回総会の報告
 - ・昨年の活動報告と今期の提案
 - ・医療援助基金3000円に…他
- 第5次調査団報告（続編）
- インフォメーションコーナー

……となっています。

Chernobyl Below the Nuclear Polluted Land To seek the soul of the place where the young live * 96 summer Study tour participants are recruiting ! !

チェルノブイリ支援運動・九州では、人と人の出会い、心のふれあいを大切にしています。サナトリウム九州の開設、被災した子どもたちの作文集出版、作文を書いた子どもたちとの交流などに取り組んでいるうちに、事故当時は幼なくてわからなかったが、最近事故のことを知ったという若い会員が増えました。そして、その人たちの口から「ぜひ現地へ行ってみたい」という声が多くあがるようになりました。そこで、前号でお知らせしたようにチェルノブイリスタディツアーを企画し、参加者を募集することになりました。要項も同封していますので、ご覧ください。いつも熱いご支援をしてくださっている皆さん、このチャンスにぜひ現地へ行ってみませんか？ 「若い人」だけでなく、どなたでも応募できます。親子参加も良いのではないでしょうか。

コースは、チェルノブイリ支援運動・九州の今までの経験を結集させ、充実したものになりました。きっと有意義な旅行になることと思います。

「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」を読んで関心を寄せた人、昨年夏来日した作文を書いた子どもたちとの

交流会に参加した人には特に興味深いものとなっています。

● 風下汚染地の被害と文化と暮らしを尋ねる

今回のスタディツアーの目玉としては、サナトリウム・九州での交流と、昨年来日したリュドミラさんの村のを尋ねることです。彼女の作文の舞台となったボレーシュの森を散策したりします。ペラルーシは、第二次世界大戦時に国民の4人に1人がナチスからの迫害を受けたところです。そして今また、チェルノブイリの事故により、ペラルーシ人の4人に1人が放射能の被害に苦しんでいます。この二つの苦しみの中を生き抜いてきた歴史の生き証人達から、あの戦争についての話を聞く場を設けています。またボレーシュはボルカの源泉です。歌、踊り、伝統工芸、商業を尋ねます。（詳しくは要項をご覧下さい）

*前回の通信、新聞等を見て、問い合わせが相次ぎ、すでに8人の方が参加を表明されています。

スタディツアに参加したいけど
お金が足りない…という人へ
コーヒーを売って資金をかせぎま
せんか？

(有)有機コーヒーでは、チェルノブ
イリ支援のためのコーヒーを扱っていま
す。今回、スタディツア参加希望者

で資金稼ぎの必要な人に限り、このコ
ーヒーを預かって販売すると手間賃が
入るようにしてくださいそうです。

例えば700~800円のコーヒー
を1個売ると300円が益金として手
元に残ります。詳しいことは、チェル
ノブイリ支援運動・事務局か、または、
(有)有機コーヒー（093/202/0068）まで
ご相談ください。

※チケットを行ないます

「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」を読んだ10代の若者たちがチャ
リティーコンサートを行ないます。作文
集を書いたこどもたちとの交流会に参
加し、文化祭でチェルノブイリのこと
を取り上げた西南女学院高校の生徒と、
本を読んで感動し、生徒会で15万円
の募金を策めた小倉東高校の生徒たち
が中心になって企画しました。この企
画に賛同したアマチュアの4組のバン
ドがロック、フォークの演奏を行な
います。出演者の年令としては、16歳
が一番多いというですから、その初
々しさは感激ものです。また、ペラル
ーシから九州大学に留学に来ているニ
ックさんのお話もあります。

とき：2月17日（土）17：30
ところ：小倉市民会館大ホール

※チケットを買ってください

チケットは、事務局、またはチラシ
にある連絡先（いずれも高校生です）
で購入できます。同封の振替用紙に入
金していただいて結構です。その場
合、振込んでから事務局に振替用紙が
届くまで約1週間かかるなどを考慮く
ださい。当日券もあります。

※チラシ、チケットを預かって下さい

何枚でも結構ですので、チラシ、チ
ケットを預かって売っていただけたら
と思います。また、チラシを置いてく
れるようなところ、ポスターを貼らし
てくれるところがありましたら、連絡
ください。

協力カンパ 1口1000円で協力
カンパを集めています。遠方で会場に
行けない人もご協力お願いします。

第6回総会報告

(時: 1995年12月10日 於: 国際交流センター)

1995年度(1994年11月から1995年10月)活動報告

[1] 主な活動

1. チェルノブイリ原発事故に被災した子どもたちの作文集「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」を出版

ベラルーシ共和国教育省と社会エコロジー同盟「チェルノブイリ」が共同で募集した「私の運命の中のチェルノブイリ」というテーマの作文の内、100編がベラルーシ国内で本となって出版された。日本では、それらを翻訳の上、さらに50編に絞って出版。作文選定の協力を新聞を通してほぼ全国に呼びかけ、200人を越える人たちから協力の申し出があるなど大きな反響があった。表紙・口絵は葉祥明さん。表紙は毛利一枝さん。梓書院から1300円で出版。6月10日付第1刷一万部発行。たちまち売り切れ7月10日付第2刷五千部増刷。1995年1月1日現在で一万三千冊が売れている。

2. 作文の作者4名とチェルノブイリ同盟議長ヤコベンコさんが来日

8月2日~12日、東京、長崎、北九州、熊本、大分の各地で交流会、観光等を行った。首相官邸ではペラルーシ共和国チギル首相から村山首相宛の親書を古川副官房長官に手渡し、約1時間懇談した。交流会には作文出版に協力した中高生が多数参加。言葉を越えた友情が生まれた。7日と10日に、ヤコベンコさんと支援運動事務局スタッフが会談。

3. ユニバーシアード・ベラルーシ選手団と会見

8月27日、ユニバーシアード福岡大会に参加したベラルーシの選手団の一行がヤコベンコさんから託されたロシア語版を持参。事務局のメンバーが本を受け取り、また、日本語版50冊を持ち帰ってもらった。しかし、モスクワのホテルに忘れたらしい、ベラルーシには届いてはいません。

4. 第5次調査団を派遣

【日 程】

1995年9月23日~10月1日

【メンバー】

中村隆市(団長、支援運動事務局)、

菊川憲司（通訳、支援運動顧問）、大友慶次（日本・チェルノブイリ連帯基金東京事務局長、支援運動東京窓口）、河野近子（支援運動大分窓口）

【訪問先】

サナトリウム・九州、学校サナトリウム「希望21」、ナローブリヤ市民病院、モズィリ子ども病院、チェルノブイリ原発、来日したリューダの村、モズィリ市役所等

【主な活動】

サナトリウム・九州にて作文集日本語版贈呈式。サナトリウム・九州にての聞き取り活動、各病院での現状調査、原発見学、支援物資贈呈、チェルノブイリ同盟メンバーとの会談

5. 国際村交流センターの国際交流ウィークに参加

10月8日、北九州市八幡東区国際村にてビデオ上映と中村団長による調査報告。エスニックバザールでのペラルーシ風料理と民芸品の販売を行う。

6. 原画展・写真パネル展の開催

作文集の挿し絵となったペラルーシの子どもたちの原画や昨年度作成した写真パネルを貸し出し各地で展示会を開いてもらった。本の内容にちなんだ講演依頼もあり、展示と合わせて行った。それにより、より広くチェルノブイリ事故について知ってもらうことが出来た。

- 4/26~30 北九州市八幡東区
レインボープラザ
- 5/8~13 黒崎井筒屋ブックセンター
- 6/16~18 鹿児島三越
- 6/20~22 コープかごしま
- 7/5 大口市ふれあいセンター
- 7/11~23 熊本YMCA子ども館
- 7/24 北九州・京筑地区図書館
協議会合宿（講演 深江代表）
- 8/10 飯塚平和のつどい
- 10/1~14 宗像ユリックス
- 10/7, 8 北九州市国際村交流
センター（講演 中村団長）
- 10/14, 15 八代白百合学園高
校文化祭
- 10/23 グリーンコープ山口県
組織委員会（講演 深江代表）
- 12/2~9 宮崎県串間市

※ また、二科展会員のデザイナー鎌田勝氏が、本をテーマにしたポスターを製作、二科展と県展に出品された。その内、県展に出品した方を寄贈していただいた。

7. 支援物資

【8月】ヤコベンコさんに持ち帰って もらった支援物資

- エコーセンサー
…モズィリ市子ども病院
- サナトリウム運営費1万ドル
…サナトリウム・九州

【9月】第5次調査団が持参した支援物資

- ビタミン剤、貧血の薬、風邪薬
…モズィリ市子ども病院、サナトリウム・九州、ナローブリヤ市立病院、放射線医学センター付属病院
- 心電計
…モズィリ市子ども病院
- サナトリウム運営費5万ドル
…サナトリウム・九州
- 作文集印税1万ドル
…切尔ノブイリ同盟

【2】切尔ノブイリ支援運動・九州の組織の現状

1、事務局体制、活動について

(1) 事務局会議の定例化

事務局会議の月1回の定例化ということで1994年12月15日、1995年1月28日、2月18日、3月11日、4月15日、6月24日、8月19日、9月9日、10月19日、とほぼ月1回のペースで開催してきました。また、昨年は本の出版もあり、事務局会議とあわせて出版プロジェクト会議を月2回のペースで開いています。

(2) 事務局体制

新事務局員：大友泰樹、内海和久、矢野宏和の各氏

姉川さん・事務局員と福岡の窓口兼務から窓口のみに

役割分担（4月の事務局会議で決定）

- ◆代表：深江 ◆事務局長：福井
- ◆通信担当：鶴田、姉川（5月まで）
- ◆会計：内海、大倉、
- ◆事務局会議：中村、大友、矢野

(3) 事務局便りの発行

1994年11月、12月、1995年1月、2月、3月、4月、5月、6月、10月に九州と下関、東京の計23の各窓口担当者と4人の顧問の方々に郵送

2、組織の現状

(1) 会員数

…1786名（10月末現在）

(2) 通信発行

通信No.28号、1月21日発行、
No.29号、4月21日発行、
No.30号、7月18日発行、
No.31号、10月27日発行、

※ 通信発行部数：約2000部

【3】前期活動の成果と課題

1、作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」の出版と運動の新たな拡がり、可能性

- ◎ 子どもたちの生きた証言を本として出版することができたことは歴史的事業として大きく評価できる。
- ◎ 同世代の子どもたちとの出会いがあり、交流があり、共同の作業が生まれ

れ、新たな運動の可能性が芽生えた。東京では報告集も作られた。

◎ 本がひとりでに動き出し、私たちの知らないところで広がりをみせた。鎌田さんとの出会い、小倉東高校生徒会の取り組みなど。

◎ 読者アンケートの回収率が高く、また、ほとんどの人は資料の送付を希望している…等。

2、本の出版部数と販売部数

◎ 初版1万部、第2刷5千部発行。現在1万3千部販売。地方の一市民グループ自費出版の本としては、予想以上の売れ行きだと思うが、歴史の証言集としての「雪だるま」として見た場合、この数字をどう評価するか。

◎ 九州のベストセラーを全国へ！、と思いつく手立てを講じたが、北海道で広がりをみせた程度であった。（北海道教祖が全道的取り組みをしてくれた）

◎ 表紙をあと5千部印刷しており、2万部は販売したい。

3、サナトリウム支援のあり方

◎ 1992年12月1日にオープンしたサナトリウム・九州、この3年間（95年10月まで）に2333人の子どもたちが入所した。ペラルーシ側との何回かのやり取りで、ようやく詳しい会計報告が届いた。内容的にまだ問題はあるがペラルーシの状況がよく理解できる。93年度、94年度は労組からの支援もあり順調に運営されて

いたが、95年度は九州からの資金だけで運営されており、入所者数も激減している。また、物価もこの3年で2倍、3倍、（あるいは10倍）と高くなっている。サナトリウムを運営していく上でかなり厳しくなっている。

◎ サナトリウムの必要性はますます大きくなっている。学校サナトリウム「希望21」がオープンし、費用の半分を政府が援助していることからもうかがえる。労組からの支援がなくなつたサナトリウムを九州だけで支えていけるか。更なる運動の取り組みが求められている。

4、調査団派遣と経費について

◎ 調査団派遣費用は個人的なもの以外は支援運動負担となる。（当面はカタログハウス社からのカンパがあり問題ない）ペラルーシでの諸費用については、これまで同盟が負担していたが、今後はこの経費も日本側で負担する。こちら側の要望をよりスムーズに実行するためにも、同盟の負担を軽くしたい。

◎ 同盟の活動全般を知る上でも、同盟の機関誌「ナバト」の記事を翻訳してもらう。最低、見出しだけでも。

◎ FAXのやり取りを何回も行う必要があるが、ペラルーシ側の国際電話料は、サナトリウムの経費として計上する。

5、ボランティア賃金申請について

◎ 医療行為の伴わない支援活動につ

いては利子配分は行われないという制限がある中で、申請を繰り返す意義があるか。申請するなら利子配分が行われるようなプランを作る必要がある。単に申請のためだけの申請ならば、時間と労力の無駄にしかならない。

◎ 来期は見送ることにしました。

【今期活動の提案と協議事項】

(1995年12月～1996年11月)

1、チェルノブイリ・スタディーツアーの取り組み

※ チェルノブイリ事故から10年が経過します。もう10年も、という時間の流れですが、チェルノブイリの教訓を風化させず次の世代に継承していく作業が求められています。作文集の出版がその1つでした。その制作過程での若者たちとの出会い、作文を書いた子どもたちとの交流を通して、チェルノブイリを自分たちの共通の問題として捉える状況が芽生えました。2度と愚かな過ちを繰り返さないための。

※ この作業を次の世代をになう子どもたちの相互の出会い、共同の作業を通して進める。

※ 詳細は別紙参照。

2、チェルノブイリ原発事故10周年・ペラルーシの人・自然・生活写真展の取り組み

※ 8月に来日したピクトル・ブイソ

フ君のお父さんから『私は新聞社にジャーナリストとして働いています。チェルノブイリの地区に住んでいます。私のところには豊富な資料が蓄積されています。それは1986年とその後の記録と写真です』という手紙が来た。

※ 手紙から拝察すると、素晴らしい資料と写真があるようだ。とりあえず、4月に訪問したメンバーがその資料と写真を確認する。写真はペラルーシ人の生活、労働、休息が紹介されている。可能ならば、100点～200点を持ち帰り、日本で写真展を行いたい。

※ また、秋にはチェルノブイリ原発の技師として働いていたボイコさんとブイソ夫親子を招待し、写真展とセッションした講演会を検討したい。

3、「黒い風の跡」英語版の制作について

※ チェルノブイリの被害にあった子どもたちの声を広く世界に伝える手段にしたい。日本で制作するよりもペラルーシで作ったほうが遙かに安いので、ペラルーシで制作可能かどうかを打診している。作文は30編前後の予定。

※ 資金は日本側が提供し、販売は日本側とペラルーシ側で行う。ペラルーシでのチェルノブイリ10周年のイベントに間に合えば広く紹介できる。

4、絵本の制作について

※ 子どもたちの絵を1月にはペラルーシに返さなければならないので、何らかの形で生かす方法を考えたい。絵

本にしてほしいという意見があり、可能ならば実現したいが、誰が担当するか。

※ 子どもたちの絵は訴える力が非常に強い。可能ならば、50点ほど手にいれて、常時原画展が開催できるようにするという方法もある。同盟と調整したい。

5、サナトリウム運営基金、切尔ノブイリ医療援助基金について

※ 医療援助基金を一口、2千円から3千円にします。サナトリウム運営基金を昨年一口、4万2千円から一口、1万円に変更しました。口数（支援してくれる人）はかなり増加し、正解だったと言えますが、募金の合計金額は減少しています。不足分を補い、安定

した支援を続けていくために医療援助基金の金額を一口3千円とします。

6、感謝状の作成

※ 10年という一つの区切りの年に、これまでの支援に感謝のするという意味で、感謝状を作つはどうかという提案がヤコベンコさんからありました。これまでもサナトリウム運営基金を申し込んでいただいた方々には「終了賞」という形で送っていましたが、今年は支援運動・九州と切尔ノブイリ同盟連名で感謝状を作成し、4月から5月には会員、及び支持者の方々に送付したいと思います。

◎ 会計報告は別紙参照

第5次切尔ノブイリ調査団報告

河野 近子

《27日》

前夜のうちに、ミンスクから230Kmの汚染地モズィリへと向かいました。モギリヨフ州モズィリ市。人口10万人のこの町は、私たちととても縁の深いところ。一昨年のパレスカヤ・ゾーラチカの子どもたちの町、そして昨年の研修医、ガリーナ・切尔ヌイショバさんの住む町でもあります。

汚染のレベルは1~5キュリー、現

在のペラルーシの法律では汚染地とは見なされません。（以前は1キュリー以上が汚染地と指定されていました。）でも子どもたちの病気はとても深刻な状況のようです。ガリーナ医師からもらった、子供のさまざまな病気発症のデータには、明らかな増加が見てとれます。

このモズィリ市を拠点に三日間の行動の始まりです。初日はモズィリ市を

南下、汚染レベル18キュリーのナローブリヤ市を訪れました。まずナローブリヤ市民病院を訪問します。ナローブリヤ市長のズボロフスキーさんが同行してくれました。

彼は……

- ・移住対象地区なので、事故前には11000人いた人口が、6059人と半減した。
- ・全体的に食品の汚染レベルは下がっているが、きのこや森のベリー類、ミルクの汚染は続いているので心配している。
- ・学校や幼稚園の給食は管理しているが、家庭での食事は野放し状態なので心配している。
- ・物資や薬やスタッフなど全て不足しているので、市民生活が正常に機能できない。
- …など、市長としての苦しい胸のうちを語ってくれました。

その後朝食をごちそうになりながら、副院長のモイセエンコさんのお話を聽きました。

- ・この病院はナローブリヤ市民対象の病院で、エコー、ホールポディカウンターなどの医療機器を使い、市民の健康管理をしている。
- ・慢性病（心臓病、高血圧、脳血管障害、呼吸器系の病気、糖尿病など）が2倍になった。
- ・出生率は、事故後下がったが今は回復しつつある。
- ・先天性障害児の発生率は、事故後ちょっと上がったが今は正常に戻った。

- ・事故後から今までに、6人の子どもの甲状腺癌が見つかった。
- ・全ての薬が足りない。
- ・自分もひどい足の痛みに悩まされているが、放射能の影響ではないかと思っている。
- ・子どもたちは早く移住させる必要があると思っている。
- …などのお話をした。持参した屬邪薬やビタミン剤、貧血の薬などをプレゼント、とても喜ばれました。帰り際に病院の人がとんできて、以前日本の支援団体から贈られた心電計の記録紙が切れて使えないでいるが、なんとかならないかとの相談を受けました。援助したあのアフターケアの大切さを感じますね。

その後役場に行き、ナローブリヤ市を含む広域の地区、ナローブリヤ地区議長のシェフツォフさんと会談しました。

- ・ナローブリヤ地区の人口は、1万8千人から1万2千人に減った。
- ・地区内32の村が移住した。
- ・しかし老人を中心に戻りつつあるので、住宅が足りなくなっている。
- ・今住宅を建設中で、57のアパートを来年までに建設の予定である。
- ・若い人は移住の必要があるが、老人は戻ってもいいのではないかと思っている。
- ・土壤や水の浄化を進め、住民が戻れる環境を作りたい。
- ・しかし放射能の浄化のてだては確立していない。

…などと話されました。どうしようもない汚染を前にしての、行政マンの苦労が垣間見えるようでした。

ナローブリヤ訪問を終えモズィリに戻ると、モズィリ市子ども病院の訪問です。この病院は、市内の子ども2万5千人を一手に引き受けている、子ども専門の総合病院です。昨年の夏、医療研修のため一ヶ月間大分に滞在したガリーナ・セルヌイショバさんは、この病院の副院長さん（偉いんだ！）。大分での縁で、モズィリ滞在の間、菊川さんと私は彼女のアパートに泊めてもらい（他の人たちはホテル）、お連れ合いともどもの大歓迎を受けました。

別府の松本小児科からプレゼントされていた心電計を持参、お土産の薬と一緒に渡すことができました。以前支援運動・九州から贈っていたエコー（超音波診断装置）が大活躍している様子を見せてもらい、とても感謝されました。

院長室で遅いお昼をごちそうになったあと、福岡のバザーに出たための民芸品の買いつけなどを済ませ、夕方からが大変でした。まずモズィリの民族音楽アンサンブル、ラドニツツアの歓迎を受け、食事をしながら彼らの歌と踊りと音楽を堪能。さすが文化レベルの高い国、民族衣装を身に着けた男女の爽やかで軽快な音楽は見事なもの。歌と踊りが加わってかもしだす雰囲気は、現地でしか味わえない独特の文化の香りがいっぱいです。ヨーロッパ公演にも度々出かけるとのことでしたが、音

樂的にも相当なハイレベルです。

ロシア民謡の好きな私は、自然と身体が乗ってきて、すっかりとりこになってしましました。こんな素敵なものを見せてもらえるなんて、こんな贅沢本当にいいのだろうかと、一人で感激していました。私たちもお返しに四人で“ふるさと”を歌い、最後にはみんなでダンスをしてお別れしました。ハイテンポのステップを踏んでいるうち、さすが胸の動悸が激しくなり、すっかり忘れていた“歎”を思い知らされたものです。

事故さえなければ、放射能さえ降らなければ、こんな明るい人々の楽しい日常が、今もなんの陰りもなく続いたらどうに…、その場の雰囲気が樂しすぎただけに、かえって裏にある現実の重苦しさが思われました。名残り惜しい思いを断ち切るように早々にその場を離れましたが、これには訳があるのです。実はパレスカヤ・ゾーラチカのかわいい子どもたちが、私たちを待ってくれているのです。

会場に着くと、舞台衣装を身にまとった沢山の子どもたちが、歓声をあげて私たちを迎えてくれました。指導者のエレーナさんをはじめ、懐かしい顔があっちにもこっちにも。今夜は私たちのために沢山のダンスを披露してくれるとのこと。子どもたちと一緒に会場までの階段を上りました。曲も衣装も新しいものがほとんどで、短い間に随分レパートリーが増えています。一段とうまくなっていて、子どもたちの

精進のあとが一目で分かりました。

今夜はなんという贅沢な夜なのでしょう。ペラルーシの音楽文化をふんだんに見せてもらい、かわいい子どもたちの精いっぱいの歓迎を受け…、重苦しい原発事故がきっかけで始まったこの国とのお付き合いだけれど、そんな深刻ななかでも、人と人との触れ合いには、こんなにも血の通った温かいものが味わえるのですね。いっとき、汚染の厳しさを忘れ、豊かな気分に浸っている私たちでした。

《28日》

さていよいよ今日は原発見学の日です。大友さんは通訳のイリーナさんと二人で、作文集の作者の一人、日本にもやって来たリュドミラ・チュブチクちゃん（愛称リューダ、14才）の村に出かけ、中村さんと菊川さんと共に、ヤコベンコさんポイコさんたちと共に、原発へ向けて出発です。

Chernobyl 原発は、ソ連崩壊後は外国となったウクライナにあるため、30キロゾーンの途中で国境を越えることになります。しかしナローブリヤ市長のズボロフスキーさんが案内役として同行してくれたため、途中何か所かあった検問所も難なく通過、30キロゾーンの中心へ向けて車は一直線に走ります。

時々廃墟となった村々を走り抜けます。事故が起きるまでは、これらの村でも人々の生活が営まれ、温かいス-

プの湯気と子どもたちの笑い声が溢れていたでしょうのに、今は家々の屋根もくずおれはじめ、塀や壁も荒れ放題、言いようのない寂しさを感じます。

ふと見ると、森のなかに数匹の犬が群れてじっとこちらを見ていました。ポイコさんによると、村人が避難するとき連れていくことができず置き去りにされた犬たちが、群れて生活しているとのこと。人間の勝手で辺り一面放射能まみれにされ、挙句に厳しい汚染のまっただ中に置いていかれた犬たちの思いはどんなだろう、さぞ人間の身勝手さを恨んでいることだろうな…と心が痛みました。気のせいいか、何かを訴えるようにじっとこちらを見つめている彼らの目が、とても哀しそうに見えました。こんな汚染のひどい所に居て、この先元氣で生きていけるのだろうか、どこか具合が悪くはないのだろうか…、彼らの目が人間の罪深さを告発しているようで、辛い気分になってしましました。

原発に近づくと、以前は村があったというところに家の跡形もありません。あまりに汚染が酷いためそのまま放置しておくことができず、全てを丸ごと埋めてしまったのだそうです。家の横に大きな穴を掘り、放射能が舞い上がらないように水をかけながら、家を丸ごと壊して埋めてしまったのだそうです。そういえば土がこんもりと盛り上がりつところがあります、あそこにもここにもという風に。これらは全て家の墓場なのです。そして作業に使った

パワーショベルが酷く汚染して使えなくなつたため、そのまま放置されているということでした。目に見えない放射能の恐怖を改めて思い知らされる気がしました。

近代的なビルの群れが見えてきました。プリピヤチの町です。原発から3Kmのところにあった原発労働者の町。人口は5万5千人でした。入り口に立つと、無人のはずの町にチラホラと人の影。住民は居ないはずですが、労働者を乗せたバスまで走っています。とても意外でした。きっと何かの作業にかり出された労働者なのでしょう。

それにしても凄いものです。アパートや学校や店や…、賑やかに生活していた町の人々が突然根こそぎ居なくなり、建物だけが十年一日のごとくただずんでいる現実。話には聴いていたけれど、こんなことが本当にあったんだ…、信じられないような気持ちで眺めていました。

このプリピヤチの町からチェルノブイリ原発が遠望できます。十年前世界中に放射能を撒き散らし、何十万人もの人々の幸福を奪い去ったあの原発が、近づくにつれ、いよいよその姿が大きく迫ります。写真では何十回となく見ていたあの石棺が、今私の目の前にあります。信じられないような不思議な気持ちでした。

事故のときは1号炉から4号炉までが稼動中で、5号炉6号炉が建設中でした。事故が起き、5・6号炉の建設はストップしたままで、1～3号

炉は今だに動いています。原発周辺の汚染は取り除かれ、労働者たちは、何ごともなかったかのようにせわしく行き来して働いています。測定器のデジタルは、自然放射線の4倍から7倍ほどのレベルを示しています。事故直後は、人が長くそこに居れば、きっと急性障害を招くほどの激しい放射線が飛び交っていたはずのこの辺りも、徹底的な除染のおかげで、人々が出入りできるほどまでに放射能の値が下がったのでしょう。

建物の中に入り、渉外担当の若者の案内で、見学コースらしきところに行きました。そこにはチェルノブイリ原発の模型が飾られ、発電のしくみが解るようになっています。そしてその奥に、爆発した4号炉の事故後の様子を再現した模型もありました。炉心の中を覗き込んでみると、日本で見た図面と同じです（当たり前ですね）。色々と説明してくれているのですが、早すぎて通訳が追いつかず、何を言っているのかさっぱり解りませんでした。後で菊川さんに尋ねると、とにかく安全には細心の注意を払っている、大丈夫だと言っていたようでした。彼の立場上そう言わなければならないのが解るだけになんとも虚しいものを感じて、優秀そうな、キリリとしまった彼の顔をマジマジと見ていました。

その後別室に通され、副所長との会見です。とても陰気そうな人です。一通り彼の説明を聴きました。事故原因の80%は人為ミスなので、世界的セミ

ナーを開いたり、命令系統のシステムを変えて運転員が主体的に関わられるようにならなければなりません。安全教育を徹底して行なうなど、安全性の追及に全力をあげているということでした。200万キロワットの電力を他の手段で補うことはできないので今は止めるることはできないなど、経済的な理由をあげて稼動し続けるをえない現実を説明していました。

その後質問をどうぞということで、ヤコベンコさんと私がいくつか質問をしました。

Q：新聞記事で、2度目の大事故が起きたらキエフもなくなるとあったが、そのことをどう思うか？

A：2度目の大事故は起こさない。新聞は読んでいない。

Q：事故の被害者の実情を知っているか？

A：それは政府の担うべき問題だ。

Q：敷地内の放射能の危険性は？

A：除染作業が進み、1/17のレベルにまで減った。モニタリングシステムやその他の安全装置を設置している。労働者の被ばく管理も行なっている。

Q：核廃棄物の処理は？

A：敷地内に安全に保管している。

Q：ソ連時代との（原発廃止に関する）政府の方針の変化は何が原因か？

A：最高会議での度々の方針の変化はあった。今現在は廃止の決定はされていない、流動的である。廃止する為には、不足分の電力の補充が保証

されなければならない。

Q：総発電量に占める原発の割り合いは？

A：30～32%（チェルノブイリは4～5%）

Q：石棺のひび割れや天井の安全性は？

A：モニタリングで監視しているから、放射線漏れは事前に察知できる。今まで修理せずにずっとたせる方針ではない。

次々に出される彼にとっては不愉快な質問に、苦虫を噛み潰したような顔でいやいや答えていました。こちらの質問に的確な答えが戻らずいらしゃる想いでしたが、これ以上聞うても無駄な感じでしたので、諦めてその場を引き揚げました。もっともっと聴きたいことがあります、とても残念でしたが仕方ありませんでした。

さあいよいよ石棺の見学です。車で近くまで案内され、50mほどのところまで近づきました。あの石棺が本当に目の前にあります。たった一基の原発が放射能を撒き散らしたために、どれほど多くの世界中の生きものが被害を受けたことか。あれほどの規模で広がった汚染と膨大な被害者、そしてこの小さな石棺…どう考へてもつながりません。不思議な想いで、もの言わぬ灰色のコンクリートの塊を見つめました。

測定器は6マイクロシーベルト前後を示しています。自然放射線の30～60倍ほどです。この辺りは、事故のとき

は核燃料のかけらなども散乱して、致死量の放射線が充満していたであろうところですが、リクビダートル（事故処理従事者）たちの命がけの作業のおかげで、こうして人が近づけるほどまでに汚染のレベルが下がったのでしょうか。

でも一体なんのために、何万人もの人のなによりも大切なはずのかけがえのない命を削ってまで、原子力に固執するのでしょうか。

国の経済安定のため？ 電力確保のため？ これだけの被害を出した当事国でさえ、いまだに原発から撤退できない現実を眼の当たりにして、「人間とは一体何なのか？」と言いようのない虚しさと哀しさに襲われました。

《29日》

モズィリ最後の日です。市庁舎を訪問し、私たちに与えてくださった数々のご好意にお礼を述べ、ガリーナさん夫妻などなど、お世話になった人々と別れを惜しんで、ミンスクへと戻りました。

同盟事務所に帰り、ラリサ・ヤコベンコさんを加えてサナトリウムの今後についての話し合いを済ませ、最後のお別れパーティです。お世話になった同盟の人々が共にテーブルを囲み、お別れの杯を交わして、あわただしく夜のミンスク駅へと向かいました。今夜の夜行列車で、再びモスクワへ戻るのです。

《30日》

モスクワのペラルーシ駅には、プロホロフさんたちが出迎えてくれていました。一昨年にはカタログハウスの職員で、私たちの世話をしてくれたモチャロフさんも、大きな身体でにこにこ笑いながら一緒に来てくれていました。今は独立して自動車の販売会社を経営しているのだそうです。日曜なので、家族とともにダーチャ（別荘）に出かける予定だったのに、一人残つてくれていました。（この国では、普通の人々がみんな郊外に小さなダーチャを持っていて、休日にはそこに出かけ、畑を耕してじゃがいもなどを作るそうです。）

彼の事務所に案内され、顔を洗ったり歯を磨いたり着替えをしたりと、身支度を整えました。実はあの列車には洗面所がないのです。おかげでスッキリした私たちは、美味しいお茶とお菓子をごちそうになったあと、飛行機の時間までモスクワ見学をしようと彼の事務所を後にしました。遅れてダーチャのお連れ合いの許へと向かう彼に感謝し、別れの握手を交わして。

（おわり）



Лидия ТЕТАКО,
зап. отделом антропологии
и экологии ИИЭФ АНБ,
доктор медицинских наук;
Ольга МАРФИНА,
научный сотрудник отдела,
кандидат исторических наук